

青葉木菟

森岡 正作

今日の授業に

木洩れ日の濡れてゐるやう柿若葉
竹皮を脱げり校歌は肩を組み
隠れ読む文方丈の木下闇
若鮎の刃金びかりに奔りけり
青葉木菟世の趨勢を推し量る
夢二にも描かせてみたき虞美人草
一斉に鳴く雨蛙もつと鳴け

早朝の清澄な空気を突き抜けてくる郭公の声は心地良い。眠気交じりのもやもやした頭の中も一気に軽くなる。子供の頃は朝早く起きて、よく小鮎釣りに出掛けた。まだ区画整理されていないなかつた田圃には、至るところに沼があり小川があつた。釣竿を下ろし始めて、じつとしてる時に聞こえてくるのが、決まって郭公であり、今でもその声は耳に残り、頭にも胸にも残っている。

ふと、登四郎先生ならあの声をどう詠んでいるだろうかと思つた。自分の記憶にはないので、先生の全集を開いて、頁をずうつと捲つて上五の語句を見た。ない、ないのである。郭公どころか時鳥、鶯までもない。森の中の鳥は殆ど先生の句の上五には登場しないのである。

そして、ようやく見つけたのが先生の若い時の句で、《今日の授業に誤ちありし青葉木菟》である。夜中の思案中、先生に寄り添うようにして鳴く、言わば生活の中の青葉木菟である。私にもよく分かり、さすが先生の句と思うが、郭公の句も欲しかった。